

校内で練習する吹奏楽部員たち



学校の自慢
 楽しく奏でて地域交流

篠山東雲高の吹奏楽部は、様々な行事に向いて演奏を重ね、住民を楽しませ、地域とのつながりを深めることに貢献している。

6人の部員のレパートリーは、演歌のメドレーや懐かしの歌謡曲、最新ポップスなど約30曲と豊富で、顧問の

教諭(56)が、アフロヘアのカツラをかぶって昭和の大ヒット曲「およげ!たいやきくん」を歌うこともある。

新型コロナウイルスのため、活動は抑制的にならざるを得ないが、部長の3年、さん(18)は「皆さんが手拍子をしてくれると、とてもうれしくなる」とやりがい語る。



包装紙を生徒たちがデザインした鳳鳴酒造の清酒「田舎酒 純米 東雲の穂」



秋の日差しを受けて黄金色に輝く稲穂。もみ殻を外し、玄米の中心の白濁した部分「心白」の状態を調べる男性指導員の手元を、生徒たちは興味深そうにのぞき込んだ。

清酒醸造用の酒米で、校内の実習田で2年生10人が栽培している。

丹波地域の醸造職人、丹波杜氏は「日本3大杜氏」の一つに数えられる。生徒たちはそうした伝統と、農産物の価値を高める「6次産業化」を研究するため、2019年度から酒米作りなどを実践する「日本酒プロジェクト」



収穫直前の酒米の状態を確認する生徒ら(兵庫県丹波篠山市で)

歳元で醸造 来春完成

今年度は実習田で、五百万石に加えて、新品種の「Hvogo Sake 85」の栽培にも本格的に乗り出した。国産の「山田錦」と韓国産の米を交配して作られたまだ新しい品種で、いもち病に強いといった特性がある。

「日本一の生産を誇る兵庫の酒米に高校生が興味を持ってうれい」。専門家の立場から生徒たちに助言を送る池上勝さんはそう言いつつ笑顔を見せた。県立酒米試験地の主席研究員で、生徒の学習をサポートしている。

今季は異例の長雨で苦労が多かったというが、9月に五百万

石2・3ト、新品種の「85」は1・8トを収穫することができた。

酒米の納品を受ける地元の「鳳鳴酒造」の杜氏、さん(56)は「試験栽培された『85』で麴を作ったら力強さがあつた。今年は高校生たちの米だけで純米酒を造ってみたい」と話す。

2年、さん(16)は農業高校だからこそできる経験がある。農業を学ぶことで食べ物

酒米新品種 栽培に挑む



兵庫県丹波篠山市

ブランド黒豆「丹波黒大豆」の生産地として名高い兵庫県丹波篠山市。同市東部にあり、生徒が食品加工や園芸などを学ぶ県立篠山東雲高校は、地域の農業振興の大きな力になっている。生徒数は71人と小規模だが、清酒の原料になる酒米作りにも精力的に取り組んでいる。自分たちで育てた新品種の酒米が来春には酒になる予定だ。



イラスト制作は、さん

2021年10月7日

読売新聞